

横芝の碑

(その五十三)

信者の念願を秘めた御手洗

〆三島薬王寺の潔豊清

新島宇三島に薬王寺というお寺があります。

薬師如来(薬師瑠璃光如来の略称で、十二の大誓願を發して衆生の病患を救い、無明の痼疾を癒す左手には薬壺を持つ東方浄瑠璃界の教主)等と広辞苑に記されています。

(を御本尊とする天台宗の寺院で、北朝帝光明天皇の暦応年間(一一三三―一一三六)に僧阿闍梨長兼によって開基された、と伝えられています。

この寺の山門を入ったすぐ右手に、寺院には珍らしい潔豊清と刻まれた御手洗(みたらし)が目につきます。

広辞苑によりますと、御手洗(みたらし)とは神社の社頭に有って、参詣者が口や、手を洗い清める所と記されていますがやはり此処ではみたらしと呼ばせてもらうことにします。

同じ山門をくぐった森の奥には三島の鎮守様が祭られているのですが、そこにはちゃんと別の御手洗が献納されていますので潔豊清の手洗はやはり、薬王寺のものと思われ、それに鎮守様の御手

洗は鎮守様の氏子の皆さんの献納ですが潔豊清は薬王寺の信者と思われる運沼村の皆さんが献納しています。

昔、薬王寺はとても立派なお堂を持ったお寺で、万病平癒の靈験があらたかでした。三島の里の人々は勿論近くの村々からも祈願参詣の人足は絶えず、特に領主の殿様の信仰も厚く、同じ知行所であった長倉村に祭られていた大師様を、お堂と共に薬王寺の境内に移して祭られ、年毎に参詣された程でした。大正六年に火災が起って今までの本堂を焼失してしまいました。辛うじて焼失をまぬかれた御本尊は取敢えず殿様が移された大師堂に安置しましたが、其後本堂の復旧も思うに委せず、その大師堂を御本堂の有った場所にお移したのが現在の御本堂だそうです。

御利益もあらたかでしたが、仏罰もまた厳しいものでした。若しうっかり馬や車に乗ったまま寺の前を通りすぎたりすると腰が伸びなくなり、また、笠をかむったまままで通りすぎると頸紐が解けなくなったりしますので、わざわざ、お寺の前を避けて通れる道を作った、ということですが、

付くようになり、笠をかむったり馬や車に乗ったまままで通りすぎる無礼はなくなりました。したがって仏罰をこうむる人もなくなつた、ということですが、

〆写真は薬王寺の御手洗で、太字で潔豊清、その横には、寛政六甲寅歳霜月吉祥日、運沼邑上谷、と寄進の年月日等が刻まれています。後に見える建物は三島の集会所を兼ねた社務所で、すぐ後の白い柱は、千葉県公害研究所の水準点の指標です。昔は、山門前の道路

は通っていないで、丁度この辺りが鎮守様の参道を兼ねた公道になっていたのだそうです。

尚、この寺の住職であった或和尚さんが、薬師如来の像を抱いて生きたまま穴に入り断食のまま生仏と化した、という話も伝えられています。次の機会に取材して御紹介上げたいと思います。(本稿取材に当り、三島の山本三樹之助氏(町文化財審議委員)の御協力をいただきました。)

(文化財審議委員小沢春光氏寄稿)

